

主に愛されている者よ

2008. 04. 22 (火)

ベック兄メッセージ (メモ)

引用聖句

使徒の働き 19章1、2節

アポロがコリントにいた間に、パウロは奥地を通してエペソに来た。そして幾人かの弟子に出会って、「信じたとき、聖霊を受けましたか。」と尋ねると、彼らは、「いいえ、聖霊の与えられることは、聞きもしませんでした。」と答えた。

8節から10節

それから、パウロは会堂にはいつて、三か月の間大胆に語り、神の国について論じて、彼らを説得しようと努めた。しかし、ある者たちが心をかたくなにして聞き入れず、会衆の前で、この道をののしったので、パウロは彼らから身を引き、弟子たちをも退かせて、毎日ツラノの講堂で論じた。これが二年の間続いたので、アジアに住む者はみな、ユダヤ人もギリシヤ人も主のことばを聞いた。

18節から20節

そして、信仰にはいった人たちの中から多くの者がやって来て、自分たちのしていることをさらけ出して告白した。また魔術を行っていた多くの者が、その書物をかかえて来て、みなの前で焼き捨てた。その値段を合計してみると、銀貨五万枚になった。こうして、主のことばは驚くほど広まり、ますます力強くなっていった。

20章17節

パウロは、ミレトからエペソに使いを送って、教会の長老たちを呼んだ。

26節から31節

ですから、私はきょうここで、あなたがたに宣言します。私は、すべての人たちが受けるさばきについて責任がありません。私は、神のご計画の全体を、余すところなくあなたがたに知らせておいたからです。あなたがたは自分自身と群れの全体とに気を配りなさい。聖霊は、神がご自身の血をもって買い取られた神の教会を牧させるために、あなたがたを群れの監督にお立てになったのです。私が出発したあと、凶暴な狼があなたがたの中にはいり込んで来て、群れを荒らし回ることを、私は知っています。あなたがた自身の中からも、いろいろな曲がったことを語って、弟子たちを自分のほうに引き込もうとする者たちが起こるでしょう。ですから、目をさましていなさい。私が三年の間、夜も昼も、涙とともにあなたがたひとりひとりを訓戒し続けて来

たことを、思い出してください。

ヨハネの黙示録 2章1節から3節

エペソにある教会の御使いに書き送れ。『右手に七つの星を持つ方、七つの金の燭台の間を歩く方が言われる。「わたしは、あなたの行ないとあなたの労苦と忍耐を知っている。また、あなたが、悪い者たちをがまんすることができず、使徒と自称しているが実はそうでない者たちをためして、その偽りを見抜いたことも知っている。あなたは、よく忍耐して、わたしの名のために耐え忍び、疲れたことがなかった。

聖書の呼びかけとは、「おいで、わたしのところに」です。マタイ伝の中で、イエス様はおっしゃいました。

マタイの福音書 11章28節から30節

「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。」

「ああしなさい、こうしなさい」よりも、ただ、「おいで。わたしのところに」と。言うまでもなく、呼びかけは疲れた人々に対してです。疲れていない人・重荷がない人はどうせ来ないからです。ある人々は、イエス様のみもとに行くと、いろいろなことをしなくてはいけなく考えていますが、決してそうではありません。精神的に疲れている人、重荷を負っている人は、ただ行けば良いと…。もしみことばを聞くなら、嬉しくなるのではないのでしょうか。「来なさい。おいで」。「なぜ？」それは「救われるため」です。けれど、救われるためだけではありません。報いを受けるためです。用いられるためです。聖書は、「栄冠を得るためである、云々」と語っているのです。

もう一箇所読みます。

マタイの福音書 25章22節、23節

「二タラントの者も来て言った。『ご主人さま。私は二タラント預かりましたが、ご覧ください。さらに二タラントもうけました。』その主人は彼に言った。『よくやった。良い忠実なしもべだ。あなたは、わずかな物に忠実だったから、私はあなたにたくさん物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。』」

忠実になることが要求されています。そのような人々は報いられます。

では、栄冠を得る秘訣とはいったいどういうことでしょうか。言うまでもなく、「イエス様を仰ぎ見る」ことです。よく知られている箇所なのですが、もう一度読みます。

へブル人への手紙 12章1節から3節

こういうわけで、このように多くの証人たちが、雲のように私たちを取り巻いているのですから、私たちも、いっさいの重荷とまつわりつく罪とを捨てて、私たちの前に置かれている競走を忍耐をもって走り続けようではありませんか。信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。イエスは、ご自分の前に置かれた喜びのゆえに、はずかしめをものともせず十字架を忍び、神の御座の右に着座されました。あなたがたは、罪人たちのこのような反抗を忍ばれた方のことを考えなさい。それは、あなたがたの心が元気を失い、疲れ果ててしまわないためです。

つまり「走り続ける」ことです。

今読んでいただきました箇所は、主がエペソという町でどのようにお働きになったかについて書かれています。主はエペソにいる人々をご覧になった時、大変喜ぶことがおできになったようです。ですから、今日の題名は、『主に愛されている者よ』とつけることができるのではないかと思います。

エペソという町は、当時商業都市でした。ですからそこでは多くの品物の取引が行なわれていたのです。ここはまた、文化と学問の町でもありましたので、人間の知恵や知識はきわめて優れていたのではないのでしょうか。またそれだけではなく、エペソの町は宗教的な町でもありました。エペソには、女神ダイアナが祀られていたのです。プラスアルファ、魔術も盛んに行なわれていました。そのことに関する書物もたくさん出版されていました。このエペソの町にパウロがやって来ました。遊ぶためではありません。時間をつぶすためでもなく、「人間を獲る」ためです。

人間はどのように導かれるかといいますと、「福音を聞く」ことによってです。パウロは、決してひとりぼっちでどこかに行ったわけではありません。いつも「福音」と一緒に行ったのです。信じる者みんながどこへ行っても（学校でも職場でも）、ひとりぼっちではなく、いつも「福音」と一緒にいるべきではないのでしょうか。もちろん、人々は導かれ救われましたが、しかしそれだけではなく、主が祝福なされると悪魔ももちろん攻撃をします。ですから、そこには対立も生じました。「十字架につけられたイエス様」と、いわゆる「ギリシヤの知恵」との対立です。パウロは次のように書いたのです。

コリント人への手紙・第一 1章23節、24節

しかし、私たちは十字架につけられたキリストを宣べ伝えるのです。ユダヤ人にとってはつまずき、異邦人にとっては愚かでしょうが、しかし、ユダヤ人であってもギリシヤ人であっても、召された者にとっては、キリストは神の力、神の知恵なのです。

自分のたくわえた聖書知識を宣べ伝えたわけではありません。もちろん別の宗教のために宣伝するためでもありません。

パウロは三年間エペソで「福音」を宣べ伝え、イエス様を紹介しました。福音が伝えられるところでは常に、人は決断を迫られるようになります。エペソにおいても同じことが

起こりました。多くの人々が導かれました。それは、彼らがいろいろなことで悩んでいたからです。心が満たされていなかったからです。「魔術の書物も焼き捨てられた」と書いてあります。燃やされた書物の金額は、五百万円以上になりました。ある人はもったいないと思っているかもしれませんが、やはり、「十字架につけられたイエス様」について考えた後では、それしかなかったでしょう。素晴らしい結果になったのです。使徒行伝の19章20節を読むと、

使徒の働き 19章20節

主のことばは驚くほど広まり、ますます力強くなって行った。

のです。もちろんこの反対の結果は悪魔がこれに対して反対をして、銀細工人のデメテリオをその反対のために用いたのです。すなわち「十字架につけられたイエス様か」、或いは「エペソの女神ダイアナか」の選択を迫られました。しかし、主のことばはますます広まり、これを見たパウロは、エペソの長老たちを選び、そしてエペソを去ったのです。後に、パウロはその時に選んでいた長老たちをミレトに呼び集めました。彼はこれらの長老たちに次のように言いました。

使徒の働き 20章20節、21節

「益になることは、少しもためらわず、あなたがたに知らせました。人々の前でも、家々でも、あなたがたを教え、ユダヤ人にもギリシヤ人にも、神に対する悔い改めと、私たちの主イエスに対する信仰とをはっきりと主張したのです。」

26節、27節

「ですから、私はきょうここで、あなたがたに宣言します。私は、すべての人たちが受けるさばきについて責任がありません。私は、神のご計画の全体を、余すところなくあなたがたに知らせておいたからです。」

パウロは彼らに、自分自身と群れの全体とに気を配り、主の群れをよく牧するようにと忠告を与えたのです。パウロは信じる者に困難が襲ってくることをはっきり語ったのです。このための警告を長老たちに与えたのです。

29節、30節

「私が出発したあと、凶暴な狼があなたがたの中には入り込んで来て、群れを荒らし回することを、私は知っています。あなたがた自身の中からも、いろいろな曲がったことを語って、弟子たちを自分のほうに引き込もうとする者たちが起こるでしょう。」

このエペソの兄弟姉妹の中で、ある人々は「役割を演じたい」と。またある人々は知らないうちに「仲良しクラブをつくる」ようになるのです。これは「まことの教会」と全く違うものです。パウロはそうなることを予測したので、当時の信者たちに注意したのです。

しかし、このエペソで導かれ、救われた人々は、本当に主を第一にした人々でした。模範的でした。エペソ人への手紙を読むとわかります。彼らは主をお喜ばせしようと心から願いましたし、主に用いられようと心から祈り続けました。このエペソ書の中に、22回「愛」ということばが出てきます。ということは、エペソにいる兄弟姉妹にはイエス様に対する「純粋な愛」が保たれていた、ということです。パウロは彼らに宛てて次のように書いたのです。

エペソ人への手紙 3章17節から19節

こうしてキリストが、あなたがたの信仰によって、あなたがたの心のうちに住んでいてくださいますように。また、愛に根ざし、愛に基礎を置いているあなたがたが、すべての聖徒とともに、その広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解する力を持つようになり、人知をはるかに越えたキリストの愛を知ることができますように。こうして、神ご自身の満ち満ちたさまにまで、あなたがたが満たされますように。

これこそ、彼らのためのパウロの心からの祈りでした。パウロも、その後アポロも、それからテモテも、最後にヨハネも、エペソで「福音」を宣べ伝え、イエス様を紹介したのです。ですから、このエペソにいる兄弟姉妹は「多くのものを得た」とははっきり言えるのです。

パウロがエペソを去って約35、6年後のエペソの群れの姿を、私たちは黙示録2章を通して見る事ができるのです。この黙示録2章を読むと、大切にされることばが出てきます。三つです。「御使い」、それから「燭台」、もう一つは「星」ということばです。

御使いは、常に主の使者であり、主の御手の中にある器、道具です。からだなる教会の目的も、主の道具であることを覚悟しなければならないのです。私たちはなぜ救われたのか。それは用いられるためなのです。

からだなる教会は、一つには燭台のようになって世の中の暗やみを照らすことにより、「主の道具」となります。また主の前に仕えて主に礼拝をささげることにより、「主の器」となります。

そしてからだなる教会は、星のように世の中の人々に光を与えることによって、「主の器」となります。ですから、燭台も、星も、御使いもともに、からだなる教会を表わす象徴のようなものです。

御使いとはただ一人の人物を指しているわけではありません。全体として主に仕えている「からだなる教会」を指しているのです。新約聖書においては、長老とは一人の人物ではなく、常に幾人かの人物を指しています。いつも必ず複数形になっています。ですから、長老はいつも一人の人物で代表されるのではなく、多数の人物によって代表されているのです。使徒行伝20章においても、エペソの教会には幾人かの長老たちがいたことがわかります。前に読みました使徒行伝の中に、はっきり書き記されています。ローマ書12章

8節によると、指導をすることの賜物は、他のいくつかの賜物の一つに過ぎないことがわかります。そしてこの黙示録2章7節を見ると、御霊の語ることはすべての諸教会に向かって語られていることがわかります。ですから私たちはこの手紙の中において、「あなた」「あなた」という呼びかけのことばだけではなく、「あなたがた」という複数の呼びかけを見ることができるのです。私たちはこの箇所を正しく理解するために、からだなる教会の課題が何であるかということについていつも考えていなくてはならないのです。

「主のからだなる教会」の使命は何でしょうか。すなわち「暗やみを照らす」ということです。「まことの光」とは、言うまでもなくイエス様です。「わたしは光、唯一の光そのものである」と言えるのは、イエス様だけしかいっしゃいません。イエス様は、「ご自分の光」を「ご自分のからだなる教会」を通して、このように与えようと望んでおられます。主のからだなる教会をご自分の「器」また「道具」として、「管」として、用いようと望んでおられます。これらを表わすことばが、今話しましたように「燭台」であり、「星」であり、「御使い」であるのです。

「からだなる教会」は、ちょうど御使いのように主の御用のために仕えなければなりませんし、また「からだなる教会」は燭台のように主の前に「光」となり、また「星」のように世の人のために「光」とならなければなりません。私たちの内側からはもちろん暗闇しか出てきません。しかしイエス様の内側からは光が出て来ます。イエス様が私たちをお用いになることが出来る程度に従って、「主の光」が私たちの内側から出て来ます。イエス様が私たちを救われたのは、私たちを用いるためです。私たちの中にご自身の光をお与えになるためです。これが「からだなる教会の使命」であり、また「課題」です。

黙示録の2章1節によりますと、主は星を手に持たれて燭台の間を歩いておられる、と書かれています。というのは、主は諸教会をみ手の中に保たれ、諸教会の間を歩いておられるのです。これは、主の偉大なる力、主の権威を表わしていることばです。イエス様が「ご自分の血」をもって諸教会を贖われました。そして、どこにでもご臨在しておられ、すべてを知っておられるお方として、諸教会を保っておられるのです。主は全てを見通され、主の御目の前に隠れているものは何一つありません。私たちは主の御目を欺くことは出来ません。主はすべてを見ておいでになるお方です。

この1節にある、「歩く」ということばについて少し考えたいと思います。このことばは、たぶん創世記3章8節に初めて出てくるのではないかと思います。

創世記 3章8節前半

そよ風の吹くころ、彼らは園を歩き回られる神である主の声を聞いた。

と記されています。これは、主と人間との交わりを意味しています。同じことばを私たちは他の多くの箇所で見ることができます。

レビ記 26章12節

「私はあなたがたの間を歩もう。私はあなたがたの神となり、あなたがたはわたしの民となる。」

これは主の願いです。「わたしはあなたたちの間を歩みたい」と。そして、

申命記 23章14節前半

あなたの神、主が、あなたを救い出し、敵をあなたに渡すために、あなたの陣営の中を歩まれるからである。

主は人との交わりを求めておられます。また私たちとの交わりをも求めておられるのです。主との交わりをもたなければ、人生は本当に虚しく満足がありません。イエス様との交わりを体験している人々は、次のように言うことができるのです。初代教会の兄弟姉妹の証しです。

ヨハネの手紙・第一 1章3節

私たちの見たこと、聞いたことを、あなたがたにも伝えるのは、あなたがたも私たちと交わりを持つようになるためです。私たちの交わりとは、御父および御子イエス・キリストとの交わりです。

喜びをもって、誇りをもってこのように言える人は、本当に幸せではないでしょうか。「私たちの交わりとは、御父および御子イエス・キリストとの交わりです」と。エペソにいる兄弟姉妹にとって、これこそがすべてでした。誤解されても、辛いことがあっても、理解できないことがあっても、もう関係ない。私たちの交わりとは、御父および御子イエス・キリストとの交わりです、と。

エペソという言葉の意味は、「愛すべき者」、「愛している者」、「愛されている者」という意味です。本当の喜びの源は、イエス様によって愛されていることから生まれてきます。パウロはこのエペソ人への手紙の中で書いたのです。

エペソ人への手紙 5章25節前半

キリストが教会を愛し、教会のためにご自身をささげられた…、

イエス様の愛の証拠とは、「ご自分をささげられた犠牲」です。パウロはどうしてイエス様のものになったか、なぜ命がけでイエス様を紹介する者になったか、そのことをガラテヤ書2章20節の後半に次のように書いたのです。

ガラテヤ人への手紙 2章20節後半

いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。

パウロはこのイエス様の愛に降伏させられてしまいました。「私にとってイエス様はすべ

てのすべてです」と。十字架の上で犠牲になられ、復活なされ、昇天なされた、また高く引き上げられたイエス様が、このエペソの兄弟姉妹に向かって語っておられました。

イエス様のおことばは常に、「ご自身の啓示」です。多くの人がそれを誤解してイエス様の教えだと。しかし違います。イエス様はいろいろなことを教えるというよりも、ご自身を明らかになさりたいかったのです。ですから、イエス様のことばはいつもイエス様の啓示そのものです。

イエス様は、しばしば、「わたしは…である」ということばを用いられました。「わたしはいのちのパンです」。「わたしは世の光です」。「わたしは門です」。「わたしは神の子です」。「わたしはよみがえりです。いのちです」。「わたしは道であり、真理であり、いのちなのです」。これは、イエス様のことばであるというよりも、「イエス様ご自身の啓示そのもの」です。同じことを、黙示録の2章において見ることができます。この中で非常に多く、「わたし」「わたし」ということばを見いだすことができるのではないのでしょうか。

ヨハネの黙示録 2章2節前半

「わたしは、あなたの行ないと…を知っている。」

イエス様の御目は炎のようであってすべてのものを見通します。「わたしは知っている。」
4節前半

「あなたには非難すべきことがある。」

イエス様はこの場合、両刃の剣のように、ことばをもって彼らに対する判断を下しておられるのです。

5節後半

「わたしは、…あなたの燭台を取りはずしてしまおう。」

イエス様は、人の外面を見ることなく、信者でさえも同じように裁かれるのです。このみことばは非常に厳しいことばです。イエス様は約束を実行されるだけではありません。裁きのことばをも実行されるのです。

また7節に、「わたし」ということばが出てきます。

7節後半

「わたしは神のパラダイスにあるいのちの木の実を食べさせよう。」

このことばの中に、イエス様の絶対的な権威を見ることができるのです。すなわち、「永遠のいのち」を与えることがお出来になるのは、イエス様だけです。もし私たちが、この「わたし」というイエス様のことばに注意するなら、私たちはイエス様の偉大さ、そしてすべてのものがイエス様のみ手の中に保たれているということを、知ることができます。イエス様のことばは「真理」そのものであり、イエス様のご判断そのものも正しいのです。

エペソにいる兄弟姉妹に対して、パウロは次のように書き送りました。もう一度エペソ書に戻りまして2章8節。よく引用される素晴らしい箇所です。結局、すべては賜物であり、贈り物であり、恵みであると。

エペソ人への手紙 2章8節、9節

あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。行ないによるものではありません。だれも誇ることのないためです。

これがエペソにいる兄弟姉妹の経験でした。私たちもこのような経験をすでにしているのでしょうか。私たちはすでにイエス様の提供されている「救い」を自分のものにしたのでしょうか。「イエス様の救い」とは、私たちの働きがなくても、私たちのいさおしがなくても、ただで私たちに「恵み」として与えられるものです。イエス様の救いは、悔い改めをするすべての人に、プレゼントとして、贈り物として与えられるものです。イエス様は、エペソの人たちの罪をぬぐい去り、彼らの過去を清算してくださっただけでなく、「聖霊によって」、新しい人格を彼らの間で創り出してくださったのです。新しい人格に生まれ変わった人は、新しい生活を送ることができるようになりました。ですから、

エペソ人への手紙 2章10節前半

私たちは神の作品であって、良い行ないをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。

そのことを、エペソにいる兄弟姉妹はよく知っていました。私たちもそのことを知っているのでしょうか。イエス様は私たちを救ってくださり、新しい生活を送るための「聖霊」を大いなる力としてお与えになりました。ですから、主は新しい生活が私たちの間でなされているかどうかを見ようとしておられます。「実」を求めておられます。

ルカは次のように書きました。

ルカの福音書 12章48節後半

「すべて、多く与えられた者は多く求められ、多く任された者は多く要求されます。」

エペソの兄弟姉妹たちは多く与えられました。彼らは主のご計画の全てを余すところなく知らされました。その結果はどのようなものであったでしょう。主はこのエペソの群れを喜ぶことがおできになったと言えます。

主は、新しい生活の七つの結果を述べておられます。

*第一番目。

ヨハネの黙示録 2章2節前半

「わたしは、あなたの行ないと…を知っている。」

イエス様は彼らの行ないがよく、非難すべきことがない、と認めてくださいました。

*第二番目。

ヨハネの黙示録 2章2節前半

「わたしは、…あなたの労苦を知っている。」

彼らが努力し、力を尽くし、自分を犠牲にしたことを認めてくださったのです。

*第三番目。再び2節です。

ヨハネの黙示録 2章2節前半

「わたしは、…あなたの忍耐を知っている。」

彼らは困難なときに耐え忍び、イエス様の御名のために苦しみを耐え忍んだと記されています。

*第四番目。

ヨハネの黙示録 2章2節後半

「(わたしは…) あなたが、悪い者たちをがまんすることができず、…を知っている。」

彼らは「霊」を見分けることができたのです。彼らは、使徒、主に選ばれ遣わされたと自称している人々が偽り者であることを見抜いて、彼らをがまんせず追放したと書かれています。

*第五番目。

ヨハネの黙示録 2章3節前半

「あなたは、よく忍耐して、わたしの名のために耐え忍び…。」

その当時、エペソのからだなる教会にも信仰の弱い信者たちがおりましたが、彼らはその人たちを耐え忍んだと書かれています。

*第六番目。また3節です。

ヨハネの黙示録 2章3節後半

「(あなたは) …疲れたことがなかった。」

彼らは、生けるイエス様のうちにある隠された「光の源」を知っておりました。彼らは自分たちの力に頼ることをせず、イエス様により頼んだのです。彼らは、イエス様を伝えること以外には何ごともなし得なかったのです。多くの困難がありましたが、彼らは勇気を失うこともなく、疲れることもなく、信仰をなくすこともありませんでした。迫害もあざけりも、彼らは問題にしなかったのです。

*第七番目。

ヨハネの黙示録 2章6節後半

「あなたはニコライ派の人々の行ないを憎んでいる。わたしもそれを憎んでいる。」

彼らは、主に敵対する者に対しては徹底的に反対をしました。一言でいうと、エペソの兄弟姉妹は、彼らの行ないに対して主の最高の賞賛を与えられました。イエス様は彼らの行ないをご覧になり、その行ないを喜ぶことがおできになったのです。彼らは彼らの持っている力を100%傾けたのです。この「労苦」という言葉は、最も困難な働きを意味しているのです。忍耐という言葉も出てきます。忍耐という言葉の中に、「主を待ち望む」ということも含まれています。主に対する生き生きとした待ち望みは、その当時のエペソの兄弟姉妹の態度を決めたのです。それは、現在のことをおろそかにして将来のことを考えるのではないのです。日々の活動は、主の来られることを目指してなされなければなりません。彼らはイザヤ書40章31節のみことばを体験したと言えます。

イザヤ書 40章31節

主を待ち望む者は新しく力を得、鷲のように翼をかって上ることができる。走ってもたゆまず、歩いても疲れぬ。

イエス様を待ち望まない者は、たちまち走ることができなくなり、疲れてしまうのです。「主を待ち望む者」にとっては、現在の状況はささいなことになります。

了